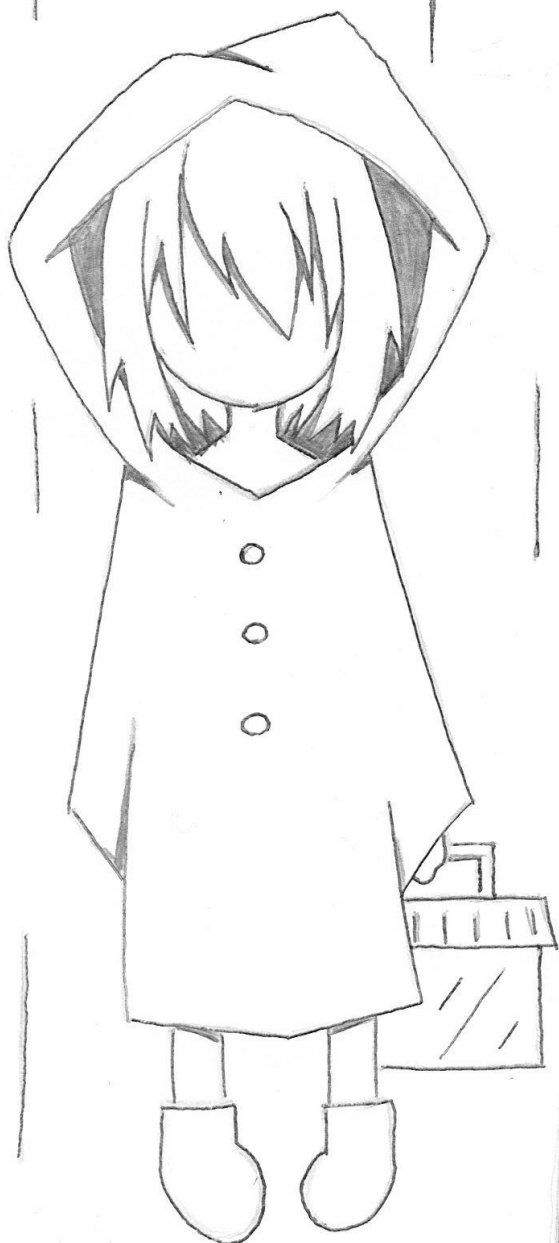


ヒュル、ハ、ハ



あちあち、あち

今朝から雨が止まない。傘を打つ雨の音が薄いノイズのように絡み付いて、私の気持を必要以上にざわつかせた。

五月が終わってすぐさま梅雨入りとは、あまりに早過ぎる気がしてならない。それとも私一人だけが、未だ五月に捕らわれ抜け出せないでいるのだろうか。私だけを置いて、時計の針は無慈悲に回り止まらない。

歩きながら、ふと足を止めては、今もまたぼんやりと考えていた。小さな教会の前だった。左手首に巻かれた時計を眺め、溜息を一つ。最後に見てからまだ一分と経ってはいなかった。どうも、迷ってしまっている。

「すみません、おねえさん」

不意に掛けられた声。

「失礼ですが、もしや、道に迷っていらつしやいますか」

「え」

風鈴を思わせる、澄んだきれいな声だった。

「お困りの様子で、立ち往生されているようでしたので」

声の持ち主は——私の直感ではあるが——私と同年か少し若いくらいの女性だった。なるほど彼女から見れば、私は〈おねえさん〉だろうか。滑らかなショートヘアで、明るいタータンチェック柄のスカートを履いている。しかし三十は下らないだろうに、その見た目と声はまるで子供のようだった。

そしておそらく、その教会のシスターだろう。

無邪気そうな目が、彼女の持つ赤い傘の向こうから私を捉えている。た。

「あの、私、神様とかはあまり信じていないので」

彼女の、ただでさえ丸い目がますます大きな丸になった。きょとん、とした顔。そして不意に目を細め、クスッ、と笑ってみせた。笑い方まで何ともあどけなく見える。

「違います、違います、そういうものではありませんよ。本当に道に迷われているように見受けられました。違いましたか？」

道に迷っている、まあ、確かにその通りだった。不慣れた土地を、文字通り手探りで彷徨し、迷い、立ち止まったのが、偶然この場所だったという話。つまり、どこからどう見られても〈お困りの様子〉で違いないのだった。

私は恥ずかしくなつて、小さくなった声で「ええ、その」と答えた。道に少し、迷ってしまつて——。

「そうですか。よろしければ案内いたしますよ、どちらまででしょうか」

断れそうもない。拒んだところで、彼女はなおも食い下がってくるような気がしてならなかった。無条件な正義感とでもいうべき、どこまでも子供っぽい考えを持つ人だと思った。もしくは、そうした後神様との〈縁談話〉を円滑に進める腹積もりなのかもしれないけれど。

私は時計を見た。急ぐ必要も無かったが、これ以上迷う必要は更

に無い。

「では、役場まで行きたいのですが」  
彼女は先ほどのあどけない笑みを浮かべ、わかりました、と言つて、そのまま道沿いを歩き始めた。

「ここからだとして少し距離がありますね。なにか、お話でもしながら一緒に参りましょう」

「どうも、お手数をおかけします」と私は礼を述べるように言った。

彼女は自らをリタと名乗った。なるほど彼女らしい可愛げのある霊名だと思った。それ以上は名乗らない彼女に、それ以上を尋ねることもしなかった。それにやはりというか年齢も、私より少し若いくらいのものであった。

「では才原さんは、先週からこちらに引っ越されたんですか」

「ええ、娘と。今日は、その住民票を届け出に」

「あら、娘さん、今が可愛い盛りの年頃じゃないですか」

「九歳になります。ただ私が言うのもなんですが、少し変わった子でしてね」

他愛のない、取り留めもない会話が長く交わされた。二人だけの井戸端会議のように。

役場にはまだ着かなかった。雨はあれから強まりも弱まりもなかったが、蝕むようなノイズの音は耳に付かなくなっていた。私は時計を一瞥した。大体二十分ほど歩いただろうか。

「——もしかして、お急ぎの用でしたか」

先ほどから、時計を気にされているようですが、とリタは付け加えた。

「あ、いえ、違います」私は取り繕うようになって言った。「すみません、その、つい時計を見てしまうのが癖になってしまつて。別に、急いでいるわけではないんですよ」

まこと、言い訳じみた物言いだけれど事実なのだ。私は度々、あの時は無意識に時計を見るようになった。腕時計のない左手首を見る

て、一人赤面することも多々あった。何時何分を気にするわけではなく、むしろ気にしてしまうのは、秒針。せわしなく、定期的に動き続ける、細い針。

リタは顎に手を添え、探偵のようないかにも考えていますという素振りを見せ、そしてまたあの無邪気な人懐こい目で私を見た。

「じゃあ、近道しちやいましょうか。少し狭い道になりますけど」

いえいえお構いなく、と言って聞く人ではないだろう、もはや。

「では行きましょう、ほら、あそこの公園の横の脇道。アジサイが咲いているところです。通り抜ければ、役場までもうすぐですから」そう言つて先を歩いていった。仕方なく私も後に続いて、アジサイの咲く小道へと入り込んだ。

私の娘は、少し変わっている。才原文子という名のその少女は、梅雨特有の長雨が降る中、庭の隅でしゃがんでいた。

私の実家、文子からすると祖父母の家でのことで、文子はまだ四歳だった。

「おかあさん」

私は傘を差して傍らに立ち、その合羽着の後ろ姿を見ていた。

「おかあさん、おつきなおさちようだい」

振り返った文子の向こう側に、薄紅色や藤色のくす玉のようなアジサイが咲いている。その葉にカタツムリが二、三貼り付いているのが見えた。

「何に使うの、フミ」

んー、ないしょ、と文子は言つて無邪気そうに笑った。悪戯を隠

す時の子供の笑い方で。

「はいはい、ちよつと待ってね」

私は母に一言断つて、風呂場にあつた口の広い洗面器を借り出し、文子に手渡した。フミ、これでもいい？

「うん。ありがとう、おかあさん」

文子はもとの方に向き直ると、おもむろにアジサイの葉を千切り、次から次へと容器に入れていった。それも、カタツムリのついている葉ばかりをどうやら選り分けているようだった。あつという間に、容器には二十数のカタツムリが葉とともに放り込まれていた。文子はそれからどうするでもなく、中でのそのそと、不気味に蠢くカタツムリを眺めていた。

雨が、次第に容器の中に溜まっていく。ぽつ、ぽつ、ぽつ——。雫がぴちゃん、ぴちゃん。一秒となく、また、ぴちゃん。

「あーめあーめふーれふーれかあさんがー」

文子が『あめふり』を歌い始める。無邪気に笑いながら歌う姿は、心底楽しそうに見えた。

水は見る見る容器に溜まっていった。カタツムリのいくつかは水底に沈み行き、苦しい様子を見せずに苦しんでいた。文子は『あめふり』を嬉々として歌い続ける。その間にもカタツムリ達は次々に溺死していった。

文子は少し変わっている。これがその最初だったように思う。

以来今日までの五年間、文子は何かしらの〈生き物〉を、大きめの虫籠のような容れ物で飼うようになった。ミミズ、バッタ、クモ、カマキリ、カナヘビ、ウシガエル——そういう類を、数は枚挙に遑がないほど。

ただ、使われた容れ物は後にも先にも、一つだけだった。

——蠱術、というものをご存じですか。

梅雨入り前の、私を捕らえて放さぬ五月の出来事になる。その耳慣れない言葉を、全く以て意外にも、私は文子の担任から聞いたのだった。

その日その午後、私は娘の通う小学校から呼び出しを受けた。文子ちゃんのことです。少々お話がございます、と。

来客室で私に応じたのが立花という、実直を擬人化したような男で、文子の担任である。それでいて、私の友人でもある彼とは、何かと相談——という名目で、大半は彼の妹さんに関する自慢や悩みや愚痴や、異常なほどの溺愛ぶり——を受けるくらいに、親しい間柄にあった。

儀礼的な挨拶を済ませ、立花は声のトーンを僅かに下げて本題を語り出した。

「それで、文子ちゃんのことなんですが、ご自宅で最近何か変わった様子はありませんでしたか」

と、言われても、文子に特別変わった様子はないように思われた。虫を育てて喜ぶ少し変わった、だがいつも通りの文子だった。

「いえ、特には……。何かあつたのでしょうか、先生」

立花は右手に着けている十字架のレリーフが入ったブレスレットを弄っていた。彼の癖である。視線は終始、彼と私の間にあるテーブルの面に落ちて、私を見ようとしなかった。「紅茶でよろしいですか？」と、初めに彼が出してくれた二つのカップからは、まだ

柔らかな湯気があがっている。

「実はですね、先ほど、文子ちゃんが教室で騒ぎを起こしてしまいまして」

僕がもっと気を配れていれば——そう先に詫びてから、二時間ほど前に起こったことを立花は丁寧な話し始めた。

昼食時のことだそう。文子は配膳当番で、給食だったカレーのルーを淡々と皿によそう係を担っていた。

特に揉めることも無く配膳自体はスムーズに終わった。全員が席に着き、いただきます、の音頭を取ろうとした、その時、突然の悲鳴が教室内に轟いた。女子の甲高く鋭い泣き声だった。

何事かと思い、勢い立ち上がり泣いている女子の所に、慌てて立花が駆け寄ると、彼女のカレーの中に見慣れない何かが見え、涙目の女子——八神ちえといった——は直立し震えたまま彼の方を見るばかりだった。

立花はその異形をつまみ上げ、よくよくその形を観て、戦慄した。見覚えのある、異常に大きく膨れた〈腹〉が付いていたのだ。

オオカマキリの死骸だった。

「うわっ、カマキリだっ！」

近くにいた男子が、立花の手の中の物体を見て叫んだ。パニックは波紋の何倍も早く、狭い教室の隅々にまで伝播した。無駄に騒ぎ立てる男子、怯えた様子の女子、泣き続ける八神。平静と変わらない表情で見守る、文子。

立花が咄嗟に文子の方を見たのと、文子が檜玉に挙げられたのは、ほぼ同時だった。

「おいムシ子、おまえがハンニンなんだろ」

全員の目が、文子を捉える。「ちえちゃんカワイソー。」「こんなキモイことすんの、ムシ子くらいだよな」

「静かに、静かにしなさい」立花は声を張り上げて言った。そうして、声量を抑え「才原。本当に君の仕業なのかい？」と文子に尋ねた。

文子は黙ったまま、クラスメイトのおよそ三十もの眼差しを一身に受けていた。表情に変化はなく、動作もない。口だけがぼそぼそと呟くように僅かに開いたが、声になってはいなかった。口はすくなく動かなくなった。肯定とも、否定とも、立花には判断がつかなかった。

押し黙る文子を見て再び男子が活気付いて野次を飛ばす。立花がそれを制する。

すると文子は、八神ちえにゆっくり、ゆっくりと近づいて行き、今度はクラスの全員に聞こえるほどの声で言った。

「——あんたみたいな奴、しんじやえばいいのに！」

そうして教室から飛び出し、走り去ってしまったという。

話が一区切りついたところで、私はこの男に腹立たしくなって言った。

「先生は、文子が出たのだと、真っ先に疑われたんですね」

込められた含みに気付いてか、本当に申し訳ありません、と立花は頭を下げる。

「頭ごなしに疑って掛かったのは、教師として恥ずべき行為でした。申し訳ありません。しかし、あのカマキリは文子ちゃんの育てていたカマキリに、間違いありませんでした。時々、文子ちゃんが僕の

ところへ見せに来てくれましたから」

文子は普段自宅で〈生き物〉を飼っているが、しばしばその容れ物をランドセルとは別の手提げ袋に忍ばせていたのを、そういう見えたことがあった。立花に見せる為だったのだろう。

「せんせー、見て私のカマキリ、こんなに大きくなったんだ」

はしやぐ文子の声が聞こえるようだ。

「あれほど〈腹〉の膨れたカマキリを、僕は初めて見ました。繁殖期のメスですら、あんなに大きくはありません。正直、見ていて恐怖さえ感じました」

「――ですが先生、それだけで文子が犯人扱いされるのは、あんまりではないですか」

文子は何かを呟いているようだったと立花も言っていた。文子の反論は、否定はそこにあつたのではないか。

「文子ちゃんが教室を出た後、僕もすぐに跡を追って、彼女から話を聞きました。あれは自分がやった、と言いました」

「そんな――」文子が、どうして。

束の間の沈黙。手付かずの紅茶は、今の私と正反対で、半ば冷めてしまっていた。

立花はブレスレットを弄りつつ、これは余談になりますが、と再び話を始めた。

「才原さん、蠱術、というものをご存じですか」

「コジュツ……?」

突然の聴き慣れない単語に、いよいよ頭が回らなくなった。

「蠱毒とか、他にも蠱道などと様々な呼び名がありますが、いわば、呪いの一種です」

コドク。呪い。

「僕は学生時代、そういった方面の研究に触れていたものですから、それで少々気掛かりがありました」

「それが、今回の文子と何か、関係が?」

冷めた紅茶を立花が一啜りした。

「文子ちゃんが知っているはずありませんし、僕の杞憂であれば越したことはないのですが。その、似ているんですよ、蠱術に」

立花は続けた。

「蠱術というのは、古代中国に起源をもつ呪術で、蟲――虫が三つに、皿と書くように多くの毒虫を用いるものです。中には毒蛇を用いることもあるようですが。それらを皆一つの器に放り込み、三日三晩共喰いをさせるそうです。呪いには最後まで残った一匹だけを用い、残りは全て贅となります。その最も強い怨念と毒を帯びた虫なり蛇なりを使って呪いをかけるのが、蠱術の一般的な方法です」

手が震えて止まらなかった。ここまでの話だけで、立花の言おうとしていることにも察しがつく。

「カマキリに毒はありませんし、今回の件とは全く無関係かもしれませんが。ただ、僕にこの呪いのことを想起させるほど、あのカマキリの腹は尋常ではなかった」

文子は千種万様の〈生き物〉を飼っていた。カマキリも、ミミズもバッタもクモも、カナヘビもウシガエルも――皆たった一つの容れ物で。〈生き物〉達に与えられたのは単なる餌ではない。喰わなければ喰われる、生きた餌。そうしてあのカマキリは、一切を喰い尽くしたのだ。毒は無くとも、その膨れあがった腹には数十の血肉と怨念が詰まっていた。

恐ろしかった。文子は何故、呪い紛いなことに手を出したのか。

「あの、先生。文子は今——？」

「今は別室に居てもらっています。」

再び、今度は重々しいほどの静寂が私達を覆った。苦虫を噛み潰したような面持ちでいて、それでも伝えなければならないことがある。俯いたまま動かない立花の醸す気配がそう語っていた。やがて、彼は決心がついたのだろう、意志の宿る目が静かに私を見据えた。

「才原さん、非常に申し上げ辛いことなのですが。文子ちゃんはどう、ここに居ることは出来ないかもしれません」

「それは、どういう、ことでしょうか」

「実害が無かったとはいえ、話はいずれ大事になります。悪意ある風評や揶揄が交錯する中を、文子ちゃんが耐えられるでしょうか。いえ、九歳の子供には、やはり無理がありましょう」

「だから、ここを去れ、と言いたいのですか」

「教師という立場上、僕も強く勧めることは決して出来ません。しかし、他ならないあなたの娘さんのことだ。僕は文子ちゃんにも、才原さんにも、傷付いて欲しくないのです」

「……」

「内密に、という形にはなりませんが、僕も出来る限りの助力をいたします。妹が勤めている学校になら、僕から事情を通しやすいかと思えますし、妹も力になってくれるでしょう」

返す言葉が見当たらなかった。文子を転校させるべきだ、などといきなり言われて苛立ちもしたが、それ以上に脱力してしまった。立花の言葉がどれもの確で正しく、何より優しく聞こえたからだ。

「当然時間が必要です。くれぐれもご検討下さい。ですから、今日

は文子ちゃんを連れて、ご自宅へお戻りになられた方がよろしいかと思えます。後の方は何とかしておきますから」

私は立花を見た。彼も、私を見ていた。

「はい……、どうも、ご迷惑をおかけしました」

よろめくようにしてソファから立ち上がった。立花のカップには紅茶がすでに一滴もなかった。手付かずで残る私の紅茶は、きつとこの後流しに捨てられてしまうのだろう。

「ともあれ才原さん、まずは一度ご自宅で、文子ちゃんとよく話をされる方が良いでしょう」

私は無言で頷くことしか出来ず、立花に連れられ部屋を出て、別室に居るという文子を迎えにいった。

近道を抜けたところから役場までは目と鼻の先だった。

リタは例の無邪気な笑顔を振りまきながら、着きましたーこちらが役場になりまーす、とガイドを真似るようにして言った。

「本当に、ありがとうございます」

「いいえ、どういたしましてー」

突然リタが、あ、と声を発し、思い出しましたとでもいったふうな顔を見せた。

「そういえば、少し気になっていたんですがー」リタは首を傾げて言った。「才原さん、どうして私がシスターだってわかったんですか？ 今日には修道服なんて着てないのに」

思わず返事に窮してしまった。教会の前で会ったから。あなたがシスターらしく見えたから。いずれにしても、私の直感からくる

意見だったからだ。

「ええと、それは——」

「兄から、私のことまで詳しく聞いてたんですか？」

「——は？」

兄。ということは、そんな、もしかして——。

「もしかして、あなた、立花先生の？」

「そうです、妹ですよ。どうも、ハジメマシテ」

あからさまな棒読みだった。リタの顔からすっかり笑みは無くなっている。無表情で、しかし目には刺すような憎しみの色が、在り在りと窺えた。

「才原さんって、私の兄と、〈親しい〉関係だったんですよ」

「な——」

親しい、というところに嫌らしい皮肉を込めた言い方だった。この人は気付いている。立花が話したのか、まさか。

「それから先日、兄から連絡がありました。あなたと、文子ちゃんのこと。今度うちの小学校に転校してくるんですってね。事情が事情だから口外はするな、教師としてよく見守ってあげてほしい、というふうに兄から言われましたが」

一拍おいて、よくよく私を睨み付ける。子供っぽい印象など何処かに飛んでしまっていた。

「お言葉ですが、リタさん、文子はやっておりません」

「はい？ ああ、虫の一件のことですか。今更何を言っているんです」

「あれは誤解です。あの子じゃありません！」

私は、文子の言葉を信じている。あの子はやっていないと確かに

言ったのだ。

「なら、どうして逃げてくる必要があったんですか？ 娘は無実だと、その場で証明すればいいだけの話じゃないですか」

「そ、それは——」

「それが出来なかったから、才原さんはここにいたのでしょ。当然です。そんなこと誰にだって出来ませんよ。一度流れた噂なんて、たとえ事実無根だとしても、全て拭い去ることは不可能なんです」

リタの言うとおりだった。それに、疑いを晴らそうと騒ぎ立てること、かえって文子を傷付けてしまう可能性を怖れたのだった。私達は逃げるしかなかった。立花に言われるがままに。

「噂だけで、人は殺せるんですよ。この意味、才原さんなら、解りますよね？」

私はリタを見た。とても信じられない。目を見開いて、この悪魔のような女を捉えずにはいられなかった。本当に彼の妹なのか。

「私、才原さんのこと好きになれそうにありませんから。というより、兄と〈親しい〉女の方なんて、正直本当に殺してやりたいくらいですけど。——まあしかし、これでも私だって大人ですから、それなりの対応をするようには努めますよ」

もはや完全に吞まれていた、この、目の前の女性に。私は一言も発せなかった。

「それでは、私はここで失礼します。よろしければ、また今度一緒にお茶でもいたしましょう。今後とも仲良くしてくださいね、才原さん」

仲良くしてくださいね、才原さん——。憎しみの色を鎮め、初めに見せていたあどけない笑顔へ途端に切り替えたリタは、そう言い



残し雨の向こうに消えていった。彼女の赤い傘が霞んで消えるまで、私はそれから目が離せないでいた。

雨の音が大きくなった。ノイズのような雨音が。

私は役場の中へと入り、目的であった作業に着手した。集中など出来るはずもなかった。頭では別のことを考えていて、転入届の欄を埋めている間も、ボールペンだけがひとりで動いている気分だった。

私はリタに喰われたのだと思った。あの無邪気な笑顔も、優しさも、私を捕らえる為に張られた、まるでクモの巣のよう。私は、そのしなやかな糸に四肢を絡め取られてしまった。魔手から逃れようと足掻くも、身動きさえままならない。捕食者が徐々に歩み寄ってくる恐怖。そして諦念。私はリタに、喰われてしまう。

十分となく届け出を済ませて役場を後にした。しとしとと、雨はなおも上がる気配がない。

私は左手首の時計を覗こうとして——止めた。

(ああ、そういうことだったんだ)

もはや、見る必要などないのだ。私が気にして止まなかった時計は、その中で動く秒針は、この永遠に降り続く雨と何も変わらないのだから。

一秒が、雨のひとしずく。そのひとしずくが、私を殺す。そのはずだった。

五年前の、ちょうど雨の日。着々と雨水を溜める洗面器に、一步步死へと向かうカタツムリ達。迫り来る死に、彼らは何を思った

ろう。……何も思うまい、思うものすらそこには在るまい。しがらみもなく、ただ、穏やかな時間の流れと安らかな死、あの水の器の中に存在したのは、それだけだ。

文子、お母さんも覚えてるよ。あのカタツムリ達は、幸せだったんだろうね。あなたの羨望も憧れも、今の私には痛いくらい分かるよ。あなたも私も、洗面器の外にはもう疲れてしまった。

でも、私達はどう足掻いても人間でしかない。人間である以上、私達が水の器に入ることは、決して許されないことなのだ。

——ねえお母さん、私ね、ほんとにカマキリなんて入れてないの。あれをやったのは、ちえなの。ちえが、私のかばんから私のカマキリをこっそりとってるのを見たもん。信じて、お母さん。だから私、泣いてるフリをして笑ってるちえがゆるせなくて、つい、しねなんて言っちゃったの……。教室から出たあと、私は一人になって、もうだれも私を信じてくれないって思った。そしたら、ほんとうのことを言うのがこわくなって、先生にだって、ほんとうのこと言えなくなかった。

お母さん。お母さん、私、人って大きい。みんな汚いし、ずるい。虫を飼ってて、いつもそう思ってた。人なんて、こんなちっぽけでみにくいものと全く変わらないんだって。人も、いつか人を食べちゃうんだって、思った。

ねえ、お母さん。昔、私がカタツムリで遊んだときのこと、覚えてる？ 私、今でも忘れられないの。私ね、あのカタツムリたちがうらやましかった。あの洗面器の中ではどのカタツムリも、他の

カタツムリを食べることなんてしないから。きっとあのとき、みんなは、ただ上を見てたんだと思う。細長いつのを上にむけて、雨がふりつづく空を、ひたすら見ようとしてたんだと思う。——だから私も、カタツムリになりたい。彼らみたいに、洗面器の中でただ上をむいて生きて、死んでいきたい。遠くの空まで見えなくてもいいから、せめて、そばに咲いてたアジサイの花なんかを、ずっと、眺めていたかった。